

# 自然の開発、破壊、保護 雑感

村 本 輝 夫

## □…………… ・ ニューズの奥にあるもの

〃南アルプス〃を縦断するスーパールン道なるものが、工事を途中にしてストップがかかった。その工事現場が、ことあるごとにテレビの画面に顔を出し、みにくさを露呈している。あの堅そうな岩石を、斜度のきつい山腹を、三角定規であたかも砂山を削るごとく、どんどん削って下方の谷に捨てている。この「こわし」の現場は「開発」であるのかも知れないが、私には「こわし」ているとうけとれた。

山腹を削るだけならまだしも、谷をその岩石の捨て場にしたための自然への影響は私どもシロウト目にも大損害、または大被害と映るのである。

道路開発の捨て物が風致をそこねたくらいならまだしも、その捨て物や開発自体が人命をうばったり、生活に直接的被害をもたらしている事例が、あまりにも多過ぎはしないだろうか。道内では、日高の林道の土砂が飯場をつぶした事件はその典型である。道南の戸井村の水害流失事件も記録的な雨によるものであるが、その上部に道路があるのを、テレビの空撮シーンから私は見きわめたのである。本州では、〃伊豆半島〃南端の地震による山崩れなどが、最

近の事件としてあげられよう。

これらは直接的原因として、天変地異があったからといわれるが、そもそもその遠因には、なんらかの人為的な自然の加工、または破壊が連坐しているのを見逃すわけにはいかない。この遠因と思われる加工や破壊がなされていなかったと仮想するとき、その遠因をつくった人間社会の責任はふくらんで限りが無い。

## □…………… ・ はかなく消えたトロコの夢

昨年、新得町の企画でトムラウシ周辺の映画を撮影するにあたり、この地をくまなく歩かせてもらった。この中で、トムラウシ温泉の手前から沼ノ原山直下へ通ずる林道があり、そのもつとも展望もよく、高いところが〃南アルプス〃のそれであった。

『この谷は函状の連続で、川水はトロコをつくり、その上に原始林が覆いかぶさっていて昼なお暗い。昔、佐竹藩の落人が財宝をかくすためアイヌを使って十勝川をイカダでさかのぼり、このトロコにいたって洞窟に運びこんだ。しかしそこが、たまたま有毒ガスの噴き出しているところで、折りかさなつたおれ、帰ってきた者は一人もいなかった。いままお、このトロコにはいった人はなく、財宝もそのままだ。もしはいる

としたら、自衛隊かどこか大学の探検隊の力かりて、ゴムボートにでも乗って下流から攻めるのが一番だろう。』

五万分ノ一地図を見ながらシナリオの打合わせ中に、地元の人からお聞きした話である。人跡未踏の地に、私たちのカメラが探る——なんともカメラマン冥理につぎる出来事というわけで、撮影の段どりを夜も眠らないで考え込んだ。

しかし、この伝説とはいえ、新得町史にも記載されている財宝とトロコは、私たちの眼前に姿を見せてはくれなかった。先の林道からその谷底が見おろされ、川底の石をなめながら勢いよく流れる水——つまり、普通の川がそこにあった。しかしながら、もし林道の土砂が谷底を埋めなかつたら、トロコは残ったかも知れない。この仮説は、さらに上流の林道を見るにおよんで、はかなくも消え去った。なぜならトロコの上流にも並んでつけられた林道の土砂がトロコがけて、どんどん流下したのであるかと考えられたからである。

かくして、真実味のある伝説の財宝とトロコは消えた。私は、この夢はいつまでも捨てないでいたい。財宝は伝説としても、現実には温泉は吹いているし、トロコは地形図からも想像されるからである。何世紀か後に「トムラウシの遺跡」として発掘される日



があるかも知れない。その日のために、ここに記録しておく必要がある。

### □…………… ・ 湿原のゆくえ・

高いところから低きへの垂直型災害は、誰の目にも害として映るが、水平型、つまり湿原の自然破壊は、垂直型のように一般の人には害として認識しがたいのではなからうか。不毛という代名詞の湿原が埋め立てにより、工場や住宅地が出現し、人間社会に利用されることによって、それは益であるというように……。てっとり早く利用しやすいという理由で、山岳地帯よりも先に、人間社会に供される運命はあまりにも見えてきている。

問題は、たとえばタンチョウの生息する釧路湿原は、どうなるのであろうか。ツル自体はどうやら生きのびてきたが、この先の住み場のヨシ原が危うい。ツルの家が破壊されていくのだ。タンチョウはサルンカムイ——葦原の神様——とアイヌが伝えるように、ヨシの中に巣を作って卵を生む。ヒナが生まれるとすぐ連れ立って湿原を歩き、餌をとる。ほかの鳥のように、親が餌を巢のヒナに運ぶという習性は持ち合せていないツルは、湿原を失ってどこへ、どのように、順応してゆくのだろうか。

北海道にタンチョウが住める地帯——ヨシの生えた湿原はたくさんあるだろうか。地図をひろげてみても、釧路湿原の代替地はどこにも見あたらない。そのうちに千島や樺太でヒナを育てて、九州のナベヅルのように、秋になったら阿寒川の流域に飛来する候鳥になってしまいかも知れない。

### □…………… ・ 少年時代の残像・

ツルのことで私の脳裏から消えた記憶——つまり忘却しきったかに思われていた、あの残像が突然ひらめいて、完全な記憶として定着した事件がつい最近おこった。

その発端は、ツルのヒナの写真からである。ツルのヒナの写真は、生まれて間もないころのヨチヨチ歩きのもの、I写真家によって発表されていたが、中間の生息はごく最近まで知られていなかった。その理由には、この時期のツルの一家は湿原の下真中であって、人間が容易に近づくこともできなかったことにはかならない。ところが釧路のツル公園内でヒナの生長過程が見られるようになり、カラー写真も堂々と、つぎつぎに発表されるにいたった。そのヒナの写真が、私の脳裏の片すみから古くて妙な記憶を呼びおこしたのである。その古い記憶とは——

私は小学校三年（昭和十四年）のころ、釧路駅北側の鳥取町に住み、共栄小学校に通ったことがある。木造平屋の校舎、グラウンドには紫色のシメジとかいうキノコがたぐさんとれ、近くの川では魚も釣り、ザルでドジョウもすくった、いまいうところの大自然の中の学校であった。家の近くを蛇行して流れる川の向う岸の草むらから、一羽のトリが土手を降り、川辺でなにかを食べていて、あたふたとまた土手をあがって草むらに消えたほんの幾秒間かの記憶が、共栄小学校時代の想い出の中にある。なぜこの一瞬が当時の記憶にこびりついているのか、それは多分にこのトリの奇妙さにあった。ニワトリのレグホーン種くらいの胴体と色、色はややうすく、首と足とがやたらに長い。羽根はなかった、——見えない——網膜に映らなかった、どうも思い出せないのである。当時、子供であった私が、どんなにこのお化けの動物を見たことを話しても、友達も、大人も理解してくれなかったことは、現代のUFOよりもむづかしいことであつたように想像される。

この事件は、これで迷宮入りのまま、私の記憶からも遠ざかり、NHKに在職中、釧路湿原でツルを取材中にも、特によみがえらなかつた。このときには、生まれたばかりのヒナを何回も見ていたのだが。

突然に、強烈に、私の脳裏をつらぬいたのは、剣路のHさんの写真に写っているヒナであった。ラタダ色、足と首の長さ、この状態が稲妻のように、ガーンと頭をなぐられたようなショックとともに、三十年前の映像が突如再現したのであった。

いまにして思いおこせば、あのときのバケモノ鳥は、まぎれもなくタンチョウのヒナであったと。アオサギではない。キジでもない。ましてや、レグホーンでもない。あ のとき、ヒナは幼年期を過ぎて少年期にはいつていたが、羽根は目立たなかつたのだ。川岸に降りて、きつと魚をとつたが、

呼ばれたかして、あわてて土手をよじ登つたのだ。この場合、羽根を広げたはずであるが、白い羽根はまだ生まれておらず、ただバランスをとるだけの妙なスタイルであつたのだ。……と、確信できる想像がつきからつぎへと展開されていく。もし、この仮説が事実であつたら、私は日本人で初のタンチョウのヒナの目撃者であるのかも知れない。いつの日か、この裏づけとなる川のあたりを歩いてみようと思つている。

## ああ 大雪山

ふたたび現実を見つめる。

昭和四十九年に一応の決着をみたものに、**大雪山縦貫道路問題**がある。この大きな道路だけは開発されないことになつたが、大雪山国立公園の中にはじゅうぶんすぎるほどたくさんさんの林道が作られていて、私の目には映る。森林内の道路はともかく、**赤岳道路**はその後、どうなつていくのだろうか。美瑛川上流から**銀杏ヶ原**の西側の林間を北に向かう道は、なんなのであろうか。既設が既設を生み、いつの間にか林間道路網ができあがつていく現実があるだけに、心配はつきない。

森林地帯はともかくというのは時間の経過によつて、あるいは復元するかも知れないという可能性があるからである。では、その可能性のほほしい、または絶無と思われるところに心を痛めるのは、よもや私人ではあるまい。大雪山上部にはそれがあり過ぎるゆえに、「大雪山の自然を守る会」が独立して生まれ、独立して活動しなければならぬ必然性があつたと思われる。その奥にあるものは、「世界にも類を見ない貴重な自然がある大雪山」と折紙をつけられているにもかかわらず、その保護や、行政指導、措置が行きとどいていないということであらう。

破壊されやすい大雪山の自然をこのまま保存するには、あるいはおそ過ぎたのかも

知れない。しかし、間に合う分野もあろう。**富士山**の**荒麓**や**尾瀬**の二の舞いを、大雪山に持ち込んでならぬ。一般利用者の協力はもちろんであるが、この公園を計画、管理している当事者に猛ハッスルしてもらわなくてはなりません。

## 静かなり北海道自然保護協会

北海道自然保護協会は、いままでは何をやって——やりとげて——きたのであろうか。ここにいたって、私はボンヤリ回想しなければならぬ。当協会の理事にご推荐いただいて、私なりにその一員としての努力、または清き一票を投じなければならぬ責任を感じるのだが、決して力みすぎではなしに、考えてみても答えて出てくるものかと思いたらない。つまるところ、「当協会の業績やいかに」の再質問となるのである。

いままでは主な活動は、地元あるいは「大雪山の自然を守る会」などのような単独団体が率先しているから北海道自然保護協会は、それを見守っている感じである。当協会の名称からしても北海道を代表する自然保護団体であると思うのだが、問題に対する協会の見解発表もまことに控え目というか、ないというふうか、つまりどのよう

対処するのか判然としない面が多い。

当協会は、このほか事を荒立てて立ち向かう必要はないのかも知れない。この場合、静かすぎると誤解を生むこともあり得る。そのよい例は、会報第十七号にあるような疑問である。もしかしてこの疑問の根源に、当協会上層部の一部の人たちが金脈そのほかの事情によつて、見解の発表すら控えているというような問題があるとしたら、当協会の運営活動は意味をなさない。

当協会会員が、依頼されて調査活動そのほかの協力を強いられることはあつても、それが協会の活動上、どしどし意見の発表があるべきだと思ふ。それが、疑問を晴らす唯一の道であらう。

人間と動物と植物が一体となつて生き長らえる大地——北海道は、もはや再現できないものであるか。少なくとも自然の保護区域だけでも、北海道開発百年以前にもどすよう努力する必要性が私たちにはあると思ふ。そして、その推し進め方をもつと強力に、勇断を迫られているのが現在の私たちの置かれている立場と姿ではなからうか。

思いつくまま、日頃気になることを綴つた次第である。——五十年一月——

(北海道撮影社)